

藤代禎輔

猫文士気焰録

猫文士気焰録

この頃日本の文壇で夏目の猫と云うのが、恐ろしく幅を利かしていると、今は天国にいる吾輩の耳にも聞えたから、ある方法を以ってその著書を見たところが、表題に「吾輩ハ猫デアル」とあつて下の方に夏目漱石著と出ている。シテ見ると猫の名が夏目漱石と云うのである。妙な猫名もあるものだと考えながら中を開けて見ると

吾輩は猫である、名前はまだ無い

と本文の冒頭に書いてある。ハテ変なこともあるもの

だ。名前の無いものが夏目漱石と名告る訳がない。何かこれには仔細のあることだろうと思つて序文を読んで見ると夏目漱石とは人間の名前で、この名前の持主が猫にかこつけ仮託して著したもののように見せ掛けている。けれども吾輩の鋭い眼で看破して見ると、これは人の物を我物顔に済まし込む人間慣用の猾手段であることが見え透いている。人間社会ではこのような横着手段を「猫ばば」にすると云っているが、これは我々猫族を見縊つた怪しからぬ言葉で聞棄にならぬ。自分共の方が余程質が悪く出来ていながら、猫ばばもないものだ。この言葉は以来「人

間ばば」と改正するが宜い。その人間ばばをするような男は吾輩の眼中に無いから、吾輩は矢張り猫を著者と極めて置く。まだ名前がないそうだから仮りに夏目の猫と呼ぼう。全体この猫が大人し過ぎるから行かぬ。自分の著したものをソツクリ人間の名前で出版されて、黙っている奴があるものか。猫善しにも程がある。著作権侵害の談判でも開いて閉口まして遣るが宜い。そこへ行くと吾輩なぞはチャンと自分の名前を標題に掲げて、カーテル・ムルと云えば直ぐ吾輩の著書と合点の行くようにしてある。独逸文学を少しでも嚙っている人間ならカーテ

ルと云うは雄猫のことでムルとは吾輩の名前だ。このカーテルについては吾輩の手柄話があるから序に紹介して置こう。それはこのカーテルと云う語を詩に読み込んで韻字を合せた事である。人間の事を独逸語でメンシユ Mensch と云うが今迄これに合う韻を押んだ詩人がないじゃないか。シテ見ると猫の方が矢張り人間に優っている訳だ。人間は風韻のない動物と誰やらも云っていたように記憶するが、多分こんな所から出たものであるう。うぬぼれしんそれを何でも一人り好がりの己惚心から無性に我々を輕蔑して、この詩的なカーテルと云う語を二日酔の異名に

使つてゐる杯は、どこまで猫を馬鹿にするのやら、丸で氣狂の沙汰だ。だから我々のような猫文士が折々世の中に
出て、遠慮会釈なく筆誅を加えないと、益々附け上がつ
て手が附けられなくなる。元來我々猫族の言語は「ミヤ
オ」と云う一語で喜びも、悲しみも、嬉しいも、楽しい
も、憂いもつらいも、一切の感情を言い盡して余りある。
人間語と来ると、国々で相違があるばかりか、同じ国内
でも訛りがあつて、その不便夥しいものだ。我々の至極
簡単でしかも微妙な言葉に対しては更に顔色なしと云つ
然るべしさ。尤も日本では猫の言葉をミヤオと云わずニ

ヤゴと云うそうだが。鶏の歌う声を独逸ではキケリツキ
ー、日本ではコケコツコーと云う格で、つまり人間の無
細工な耳で聞いて、人間の無細工な文字で現わすから、
こんな規則外れがあるのだ。それにしても、その相違た
るや如何にも些細で、ニヤゴと云っても、ミヤオと云つ
ても韻は慥かに合っている。猫語の詩的であるとは何と
云っても争われない。こんな重実な便利な精妙な言語を
持っていないながら、何を苦しんで、不自由千万な人間語を
遣って著述をするかと訝かるかも知れぬが、我々猫族の
言語を解することの出来ぬ無器用な人間を済度してやる

う、と云う猫族特有の大慈大悲な菩薩心から面倒な蒼蠅
い事を思い切って遣るのだから、人間たるもの余程難有
く思つて、猫族に対する態度を改ためなければ、罰が当
つて永劫浮ぶ瀬があるまい。嘗てライン河畔のボン大学
に留学の仏蘭西人某が独逸の海老茶式部を相手に、日本
語はカカオ、タビオカ、ムスメの三語から出来ていて、
声の工合、調子の塩梅で何事でも用が弁ずると云うのを
聞いたことがある、一語万能の猫語に比べると、まだま
だ遜色はあるが、人間語としては中々進歩したものだ、
猫語に最も接近していると感心したが、この頃日本の言

語文章を研究して見ると、あれは佛国流のお弁茶羅に過ぎなかつたので、實際日本語は余り進歩した言葉ではない随分複雑で漢語もあれば梵語もある、西洋語も恰好を崩して居候をしている。おまけに文字と来たらこの位蕪雑なのは他に類があるまい。夏日の猫がこの言語文字を兎に角書きこなし、使いこなしして日本人間に持て囃されているところを見ると、我々猫族の才氣非凡なのに今更の如く驚かるる。この猫も流石吾輩の同族だけあって、人間の弱点に向つて中々奇警な觀察を下している、痛快な批評を加えている。但少し気に喰わぬのは、まだ世界

文学の知識が足らぬためかも知れぬが、文筆を以って世に立つのは同族中己れが元祖だと云わぬばかりの顔附をして、百年も前に吾輩と云う大天才が濁逸文壇の相場を狂わした事を、おくびにも出さない。若し知っているのなら、先輩に対して甚だ礼を欠いている訳だ。現に吾輩等はチークが紹介してロマンチックの大立物となった「長靴を履いた猫」を斯道の先祖と仰いで、著書の中で敬意至れり盡せりだ。尤も猫族の方には文学史とか何とか云うクダらない七面倒臭ものがないから吾輩のことを夏目の猫が知らぬのも無理はない。どうかして一寸知ら

せて遣りたいのだが、今は世を隔てて幽明界を異にして
いるから、如何に交通は便利になつたと人間は威張つて
も娑婆と天国の消息を通じ合う訳には行かぬ。止むを得
ぬから、夢知せに頼る外、途がないと思つて如才なく遣
つて見たが、夏目の猫はまだ夢を見る程度に進んでおら
ぬと見えて更にお通じ無しと来た。吾輩の主人が親友の
音楽師クライスレルに旅行の留守中吾輩の世話を頼んだ
時、クライスレルが犬は夢を見るようだが猫にはこの芸
が出来そうにない。ムルは賢くても夢を見ることはとて
も出来まいと尋ねたら、主人がなに盛に夢を見るようだ、

それどころか、夢現の間に彷徨って沈吟しているところを見ると、何でも恋に焦がれているか、さもなければ悲劇の工夫中に相違ないと答えた。吾輩の主人だけに中々達見家だ。吾輩は同族の中でも群を抜いているから夢位見るのは何の造作もなかったが、夏目の猫には夢枕に立っても更に効能がなかった。けれども日本にも独逸文学で飯を食ってる人間が幾らもあると云うから、吾輩の紹介をする奴も一人や半分は屹度あるだろうと思つて待ち構えていたが一向そんな景色も見えない。余りにも齒痒くて堪らないから、今年正月二日の初夢にこの素人そじんと云

う男の夢枕に立って見た。ところが屠蘇に食い酔って頭が無茶苦茶になつてゐるものだから、如何に丙午の歳だと言つて猫の尻馬に乗るのも智恵が無さ過るとか何とか愚にも就かぬ事を云つて取合ひそうにもしない。これは人を見損なつたか知ら、吾輩にも似合わぬ事をしたと思つたが、どうせ乗り掛つた船だと云う腹で、それから度々神経衰弱の夢を驚かして根気能く説いて聞かせている中に、新小説とか云う雑誌に何でも二年越しの約束があつて、今度は是非何か書かなければならぬことになつたものだから到頭往生して吾輩の口述を筆記することになつ

た。元来文才も何もある男で無いから吾輩の妙文句もこの男の筆に掛けたら台無しになって仕舞うだろう。だから何でも面白い所があったら吾輩の才気が溢れたもの、まずい所は残らず素人の打ち壊しと心得て読んで貰いたい。

吾輩が生前、本を書いた時は猫族の青年子弟に心得になるようにと云う趣意が眼目であつたけれども、猫眼に映ずる人生観が大分這入っているから、人間にも至大の利益を与えた。夏目の猫の書き方も大体に於て吾輩と變りはないが、猫の長所を發揮する上に於て少しく物足ら

ぬ感がある。吾輩の著書は世界文学史上有数のものとなつてゐるから、今更ら自画自賛を遣る必要もないが、兎角通じの悪い人間や、その人間に宜いように扱われて喉をコロコロ鳴らしている夏目の猫を相手なら、大人気ないことまでも言つて見ずばなるまい。

話の順序として生れた時の事から始めよう。自分がどこで生れたかと云うことは後で、母親からでも聞かなければ如何に聡明な猫でも分る筈がない。この点は夏目の猫が書いてる通り吾輩にも見当がつかぬ。後から想像して見ると穴蔵か木小屋か屋根裏で生れたのであらうと考

えられる。独逸語で生れる事を娑婆の光を見ると云うが生れ落ちた時の我々の眼は幕が懸っているから娑婆の光を見ることは出来ぬ。人間の赤子だって眼が開いてるとは云う条、光が見えるかどうか頗る怪しい。それを何でも大きくなつた人間が自分を目安にこんな胡乱な言葉を拵えたのだ。この寸法で勝手次第な理屈を捏ね廻すのだもの、真理も何も人間に分る筈がない。それはどうでも宜いとして、始めて吾輩の意識に判然と上つたのは息も碌に衝けない、大層窮屈な函の中に押し込まれて、切ないやら、怖ろしいやらで悲鳴を揚げた事である。所へ二

ユ一と這入り込んで荒々しく吾輩を引攫んだものがある。後で分つたがこれは人間の掌に相違ない。この時吾輩は天の賜たる靈妙の力を自覚し且つこれを実行する機会を得た。それは天鷲絨の如く軟かい手套を嵌めた様な前足から、尖った、しなやかな爪を稲妻の様に閃かしてその掌に喰い込ましたことである。すると掌は吾輩を函の中から引き摺り出して、放りつけた揚句、今は立派な髭の生えてる当りへピシヤリピシヤリと続け様にお出でなすつた。今考えて見ると前足の微妙な筋肉運動で痛められた返報に張手を食わしたものだ。お蔭で吾輩は始め

て道徳的原因結果の経験が出来た。ハット思つて直ぐ爪を引込めたが我れながらその迅速なるに感心せざるを得ない。これは詰り道徳的本能の然らしむる所であろう。

扱掌は吾輩を放り出したが、頓て今度は首玉を攫んで下へ押し附けたので口が液体の中へ漬つた。その液体を舐めて見ると何とも云えぬ良い心持になつて来た、どうして舐める気になつたものか、今以つて自分にも分らぬ所を見ると、何でもこれは身体的本能の仕業に相違ない。今思えばこの液体は牛乳であつたので、自分は空腹である所へ、牛乳を啜つて言うに言われぬ快味を感じたので。

こう云う風に吾輩の發育は道德に始まって身体的に移つたのである。この辺も人間には迎も真似の出来る事でない。その内に吾輩は長足の進涉を以て喉をコロコロ鳴らす芸や、尻尾を輪形に蜿蜒らせて曲線美の極致を現わす術や、前に一寸吹聴して置た一語万能の猫語や様々な芸当を覚え込んだ。これが目の見えぬ内に悉皆自得が出来たのだから、なんと吾輩の進歩は素晴らしいものではないか。

目の幕が取れて物が見える様になった時の心持はまた格別であつた。が始めて眩しい光を浴せ掛けられた時は

喫驚した。この光りや、目に写る森羅万象に慣れるまでは幾度も続け様に仰山な嚏くさみをしなくてはならなかった。すると間もなく視力が確かになって、丸で年来の練習を重ねて来たように手に入った。苦沙弥くさみと云うと夏目の猫の主人の本名だか変名だかであるが、嚏と云うものは猫の発育上右の如く大事なものであるから、恐らく夏目の猫が飼育の恩に酬いるためにこの絶妙な名前を主人に授けたものである。して見ると主人の方でも早くこれに劣らぬ立派な名前を付けてやらなくては、猫に対して義理が悪い、その癖人間は我々を恩知らずと極め込んで三

年の恩を三日で忘れると云つてゐる。頼山陽杯も猫狗説とか云うものを書いて狗を無性に讃め立て、我々の事を追従者だの軽薄者だのと散々悪態をついている。これは例の人間持前の伝説で取るに足らん。吾輩の朋友中にもポントと云う犬があつて、犬の性質に就ても深く研究しているから犬猫優劣論では確乎たる意見を懐いているが、ポントの話をする時に譲つて置くとしよう。併し人間の中にも少しは訳知りがあつて人非人のことを犬畜生にも劣つた奴と云うし、露西亞の犬とか、警視庁の犬とか云う言葉も折々耳に這入るようだ。ウイルデンプルフと云

う独逸の詩人は頼山陽とはあべこべに犬を追従者阿諛者おべつかものと罵つて猫を寵愛している位だ。大分話が横道に逸れたが扱此視力と云う結構な靈妙な力を得たのは宜いが、脊の低い痩せこけた老人を見た時は、ぎよつとして思わず例の悲鳴を掲げた。我々猫族の方では白黒の斑のある毛皮を被たものは珍しくないが、雪の如く白い頭髪と濡鳥の様に黒い眉毛と兼ね備えた人間は吾輩の主人より外見た事がない。この老主人は真黄色な寝間衣を着ていたが、それが何だか恐ろしく気味が悪いので、まだ意気地のない体を出来るだけ動かして、軟かい蒲団を這い下りた。

老人はズツト吾輩の方へ身を屈めたが、その容貌が如何にも親切らしいので吾輩は安心して気を許した。主人は吾輩を持ち上げたが、この時は爪の筋肉作用を用心して遣らなかつた。引搔くと云う觀念と張手と云う觀念と吾輩の脳裏で自然に結び付いて仕舞つたからである。案の定老人は吾輩に対して好意を有っているので、甘い牛乳の前へ卸してくれた。それを一生懸命に舐め盡すのを見て彼は少からず喜ぶ風に見受けた。色々吾輩に話し掛けてくれるが薩張り分からぬ。まだ世慣れぬ子猫の事で人間語を解すことが出来ぬのである。主人は何でも様々の

学問や技術に達している人で出入の人々には丁度吾輩の毛皮に黄ばんだ斑点ぶちのある都分即ち胸に勲章をぶら下げている人もある。が何れも主人に対しては尊敬を表している。名前はアブラハムと云うそうだ。随分高貴の人とも交際はあるが、住んでいる部屋は何階か能く知らぬけれども一番高い所でしかもせせこましい部屋である。それが吾輩には却て仕合せで散歩が出来るようになった。から窓から直ぐ屋根に上れるので大きに便利であった。

前に自分はどこで生れたか見当がつかぬと云ったが、どうも屋根裏で初声を揚げたものらしい。穴蔵や木小屋

では決してない。風土氣候風俗習慣が氣質氣風に及ぼす影響は中々大したものだそうなが、吾輩の向上心、勇猛心、飛躍心は高い高い誕生地に萌したものとしなければどうしても説明が附かぬ。それに木登りの巧みな事、飛び移り、躍り越しの放れ業が争われぬ証拠だ。我故郷は屋根裏に極まった。嗚呼故郷が恋しい。懐かしい。今濺ぐこの涙は故郷に捧ぐる涙である。この得も云われず麗しい、愁いを帯びた歓呼のミヤオは故郷に献ずるミヤオである。この飛び、この躍りは故郷の名誉を揚ぐる飛躍である。この裡には徳が籠っている、愛国の勇氣が籠

っている。嗚呼故郷なるかな。故郷なるかな。我故郷の屋根裏は吾輩の大好物なる鼠を惜気もなく供給する。合間には腸詰や豚の脂身を烟突の中から分捕する事も出来る。雀を平取りにすることも出来る。運が好ければ鳩と
いう意外な獲物をせしめることもある。嗚呼故郷よ、故郷よ、我愛郷心は廣大無辺である。

吾輩は生れ付きの詩人——ではなかった——詩猫である。それで自然を愛すること非常だ。殊に夜の天地を愛する。月明に星稀な夜屋根の上に出て、大空を仰いで人間世界を脚下に見降す時の心持は無類だ。神来の詩想が

無尽蔵に湧いて出た。這般の消息は吾輩のように高い立場に舞い上る事の出来ぬ人間風情に迎も分りようがない。今舞い上ると云ったが、実は攀じ上ると云う方が適当なのだ。けれども詩人は決して足のあることを云うものでない。吾輩の様に四本の足があっても云わぬ。何でも翼があつて天翔ることが出来るものだ。昔から相場が極つてる。ところでどうして吾輩に詩作が出来るようになったかと思ふものもあるだろうが、それは吾輩の修養談を聞けば直ぐに分かる。追々その方に取り掛かる積であるが、屋根上りの序に一つ夏日の猫に忠告した

い事がある。君も吾輩の様に屋根上りを始めたら宜からう。成程日本の家屋は西洋のように高く出来ていないから、吾輩程痛快な立場に上る事は到底出来まいが、それでも人間を眼下に見下すことは慥かに遣れる。垣根渡りを遣って烏に馬鹿にされるよりは遙かに気が利いてい
る。蟬取りや螳螂狩かまきり以上の高尚な楽が出来る。雀狩も宜からう鳩を待伏せするのも随分面白い。烏にだって屋根の上なら後れを取るものか。それに君の主人は俳句や俳体詩を作るそうじゃないか。君も少し遣って見給え。馬
上や厠上等より何と云っても屋上の方が高い丈に句を案

ずるには利目が多いよ。文士猫とも云われるものが詩作が出来ぬようでは余り威張れないから是非遣るべしだ。

これから愈吾輩の修養談に移る順序だが原稿締切りの日限が切れるそうだから、残念ながら割愛せざるを得ない。

余り素人が愚図愚図しているから、折角佳境に入り掛け、中止しなければならぬ始末さ。何れ折を見て復話を続ける積だが、未来の事はどうなるか分らないから真逆の時の用心に吾輩の原書を一寸紹介し置こう。表題は前にも云った通りカーテル・ムルで通るが、この原書を出版した人はアマデウス・ホフマンと云う音楽者と画工と

兼ねたロマンチックの詩人だ。この男が吾輩の著書を出版する時に、音楽師クライスレルの伝記と吾輩の著述と入れ混ぜて印刷して仕舞った。どうしてそんな間違が起ったかと云うと、吾輩が著述をする時分に一冊の本を引きちぎってその紙を原稿紙の下敷にしたり、押紙に使ったのをその儘引き纏めて、ソツクリ活版所へ廻したからだ。しかるに吾輩の様な天才の仕業は何の気無しに遣った事にも自然順序が立っている、印刷が出来上ってから読んで見ると、クライスレルの伝記も切々ではあるが、話の筋がチャンと通るようになっていて、ところが浅墓

な人間の身鼻屑から、吾輩の著作まで出版者のホフマンが書いたもので、クライスレルの伝記をその間に挿んだのはロマンチック流に読者を愚弄するホフマンの悪洒落だろうと故事附けた。おまけにホフマンが生前カーテル・ムルは我が最大傑作だ杯と白らを切った事もあるし、自分の全集中に入れたものだから、愈々カーテル・ムルはホフマンが想像で産み出した架空の猫だと極め込んで吾輩の文動を人間の手柄に誤魔化し付けようとしていて。所が左様旨くは問屋で卸さない。吾輩が控えていて見事人間の猿知恵を素破すっぱぬ抜いた上は、向後誰も吾輩の著

作権を疑うものはあるまい。これで漸く胸が清々した。どれお暇と出掛けようか。なにまだ今夜の話の表題が附いていない？ 表題杯はどうでも構わないから、何とでも勝手に附けて置くが宜い。若し余りまずかったら、今度来た時に好い名と取換えて遣ろう。あばよ。

日本文学電子図書館

文芸と人生

著 者：藤代禎輔

作成者：宮澤一郎

出版社：不老閣書房

1914年4月15日 発行

日本文学電子図書館